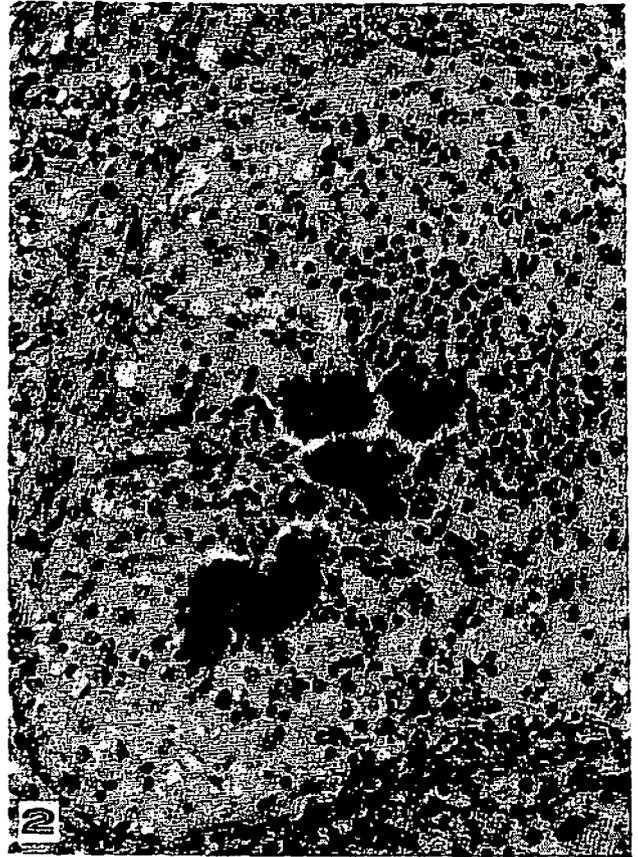
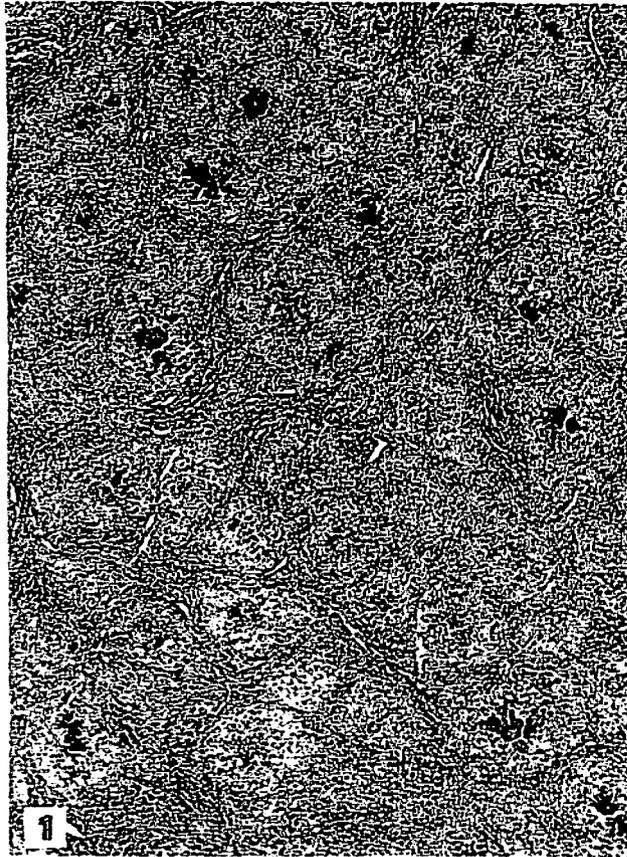


牛の右耳下の皮下腫瘤

家畜衛生試験場病理第一研究室出題 第17回獣医病理学研修会標本No.268



本例は牛，4才の雄黒毛和種である。宮崎県で1975年1月から1976年7月までに5,137頭中，127頭にアクチノバチロシスが集団発生した。この例はその中の一例である。血液検査では，赤血球680万，白血球2,700，うち好中球23，好酸球7，リンパ球68，単球2%であった。発熱，疼痛はみられなかった。アクロマイシン100mgを3日間連続して静脈注射したが治療効果はなかった。腫瘤の肉眼的所見は，4×3cm大の卵円形・帯黄色であり，剖面においては結合織に被包された膿瘍であることが明らかであり，内容には白色クリーム状の膿汁がみられた。細菌学検索では，*Actinobacillus lignieresii*が分離された。

組織学的には，中心部に菌塊を有した小さな分房状の肉芽腫が集合し大きな肉芽腫を形成している（図-1，HE染色，×40）。この分房は，炎症過程の様々な経過を示しており，菌塊に対して好中球が激しく浸潤しているもの，好中球の周囲に類上皮細胞が繁殖しているもの（図-2，HE染色，×250），好中球がほとんど消失し，類上皮細胞に置換されているもの等がみられた。類上皮細胞のあるものは癒合し多核巨細胞を形成していた。小さな分房状の肉芽腫の周囲には，線維芽細胞が増殖し細いコラーゲン線維が取り巻いていた（図-1）。その間に

は，リンパ球を主体とし，プラズマ細胞，好中球の浸潤がみられた。

菌塊の染色性は，HE染色では赤色，PAS染色では強陽性，グラム染色では陰性，ゴモリのメセナミン銀(GMS)染色陰性，アクリジン・オレンジ染色，蛍光顕微鏡観察では，clubは黄緑色，clubの下に淡いオレンジ色に光る所がみられた。

アクチノマイコーシスと比較すると，以下の表のようであった。

	アクチノバチロシス	アクチノマイコーシス
菌塊	やゝ小さく離散	大きく馬蹄形
Club	小さい	大きい
グラム染色	陰性	陽性
PAS染色	陽性	陽性
GMS染色	陽性	陽性
生体反応	好中球，類上皮細胞	好中球，類上皮細胞
	線維芽細胞	線維芽細胞
結合織	厚い	薄い